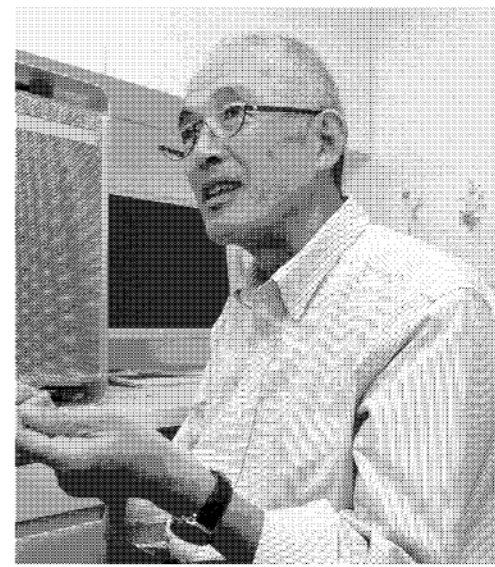


文字の魅力にひきつけられ  
5年かけて新書体を制作

2000年に掲載された、サントリー・モルツの新聞広告。実はこの紙面の中に、新しいモルツとともに鮮烈なデビューを飾ったものがある。

その名は「丸明オールド」。どこかクラシックで温かい雰囲気を感じさせる、それまでになかった新しい書体だ。



「朝刊を上げてあの新聞広告を見たときは、涙が出ました。『丸明オールド』はまだ発売前だったんですが、アートディレクターの副田高行さんが使ってくださいました。反響も大きくて、本当にありがたかったですね」

そう当時を振り返るのは、「丸明オールド」を生み出した書体設計家、片岡朗さんだ。

「急な仕事で暇になって、僕は今まで何をしていたんだろう？」と自分自身を問い直したんです。最初に勤めた会社では、イベント会場を使うパネルに文字をひたすら書いていた。オリジナル書体のコンテストに応募して賞をもらったこともある。しかも、仕事場には書体を作るのに最適なマッキントッシュ(Mac)がある。それで、原点に戻る感じでなんとなく書体の制作を始めたいんです」

手で小さいきれいな円を描くのは非常に大変だが、Macならほんの瞬間、円を生かすなら、ゴシック体より明朝体に向いている——そう考え、仕事の合間に少しずつ新しい明朝体を作った。約5年かけて完成に近づけた。それにしても、いくらMacがあるとはいえず、

約7千字に及ぶ日本語の文字をどうやってひとりで作ったのだろうか。

「時々聞かれるのですが、実はゼロから文字を作るのではないんです。過去の文献や辞書から好きな文字をスキャンし、その「骨格」に肉付けしていくのが僕のやり方。明朝体は、過去の遺産の方が優れています。理由は簡単で、昔は誰もが筆を使っていたから。僕はそういう遺産を使わせてもらい、今の社会が好む味付けをして、次の世代へ送り出しているんです」

書体はこれまでも、時代やメディアに寄り添う形で進化を遂げてきた。新聞に使われている、新聞明朝もそのひとつだ。「この新聞社の新聞明朝も懐かしくて平べったく、それぞれに小さくても読みやすい工夫がなされています。人は長い時間見ている書体を無意識に好きになるので、新聞明朝に愛着を感じている人もきっと多いでしょうね」

書体をどういじるか、あれこれ考えているときが一番楽しい、と愉快そうに笑う片岡さん。文字という、人間にとってもっとも重要なコミュニケーションツールをデザインする仕事に終わりは無い。

「できる限り長生きして作り続けたいですが、最後はやはり明朝体ですね。年をとらないとわからない、わび寂びの要素を加えた、枯れ明朝とか。なんとなく良さそうな感じ、しませんか？(笑)」

文/大田 聡 写真/星野 章

緑の絨毯。

様々な設備と充実した練習環境を整える

東京国際大学

オープンキャンパス 8月28日(土) 9月5日(土)

URL <http://www.tiu.ac.jp/>

白い  
上昇気流。

伸びる意欲にしっかり応える

東京国際大学

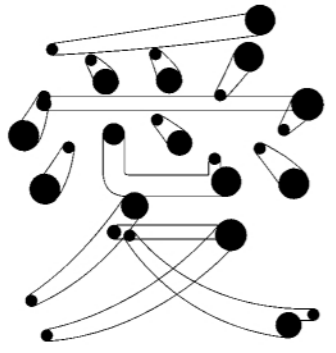
オープンキャンパス 8月28日(土) 9月5日(土)

URL <http://www.tiu.ac.jp/>

2009年8月25日付朝刊掲載 「丸明オールド」が使われた東京国際大学の新聞広告

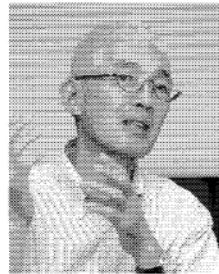
広告特集

図1



丸明朝体とは

文字を構成するエレメントに丸を使っています。丸明オールドは、ゴシックに丸ゴシックがあるように、明朝体にも丸明朝体というカテゴリーがあることを実証した書体です。とくに漢字には多くの丸が使われています(図1)。漢字のあたらしさは伝わりにくいので大きくして丸がどこにあるかを示しました。縦線、横線、点、トメ、ハネ、ハライなどどれも先端が丸く処理されています。直線を意識した漢字、筆の動きを強調したカナ、四角いスペースにこだわらない形。でも文章になると読みやすい、不思議な可読性を持った書体です。(談)



片岡 朗さん  
かたおか・あきら/1947年、東京都出身。レタリング事務所、デザインプロダクション、広告会社を経て90年独立。2000年2月「丸明オールド」発表。05年3月「iroha gothic family」発表。07年1月「丸明朝体family」発表。09年10月「丸丸gothicABC」発表。07年11月には、『文字本』を誠文堂新光社から上梓(じょうし)。第2回石井賞3席、朝日広告賞入選、日経広告賞、雑誌広告賞など受賞多数。